

平成26年度 第1回滋賀県公立大学法人評価委員会開催結果（概要）

日 時 平成26年6月26日（木）
10時00分～13時15分
場 所 滋賀県立大学管理棟3階 教授会室

【出席委員】 磯田委員、位藤委員、奥田委員、郷委員（委員長）、古川委員

【事務局】 北村総務部長、金山総務課長、他関係職員

【県立大学】 大田理事長（学長）、川口副理事長、菊池理事、仁連理事、布野理事
藤川事務局次長、他関係職員

1. 開会

- 北村総務部長あいさつ
- 委員、大学および事務局の出席者紹介
- 委員長の選任
 - ・委員の互選により、郷委員が選任された。
- 委員長代理の指名
 - ・郷委員長より、位藤委員が指名された。
- 委員会の進め方について
 - ・委員会の進め方について、事務局から説明

2. 滋賀県立大学の概要説明

- 大田理事長から滋賀県立大学の概要説明

3. 学内調査（視察）

- 授業見学、大学施設等の視察

4. 質疑応答

（委員長）皆様、お疲れ様でした。授業見学など学内を見学させていただいて、素晴らしいものがたくさんありました。キャンパスや建物の非常に個性的な雰囲気が印象に残っています。これから約30分間は、質疑・意見交換を行いたいと思います。学内をご覧いただきまして、ご感想やご質問があたりだと思いますので、自由にご発言いただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。なお、ここからは滋賀県立大学の各学部長、大学事務局の各グループリーダーにも参加していただいております。

（委員長）大学としての建物、キャンパスの作り方に統一のとれた美しい理念があるということを感じました。以前おりました大学のような古い大学ですと、建物はいろいろ追加や付け足しをして、

バラバラで統一のとれたデザインはあまり考えられていないことが多いのですが、ここは20年前の良い時期に作られた大学で羨ましく感じながら拝見しました。学生さんが来なくなる、学びたくなる、建物の高さや周りの風景などすべてが自然に溶け込み、心地よい場を作られている感じがして、学びの場として素晴らしい環境だと思いました。

(大学) この大学は、建築家の故内井先生が開学時からマスターアーキテクトという考え方でキャンパスを計画しました。マスターアーキテクトは、瓦屋根を使うこと、勾配をそろえるなど緩やかなコードを持ちながら、それぞれ個性的な表現をするという仕組みで、今も内井先生の後継者を置いています。先ほど見ていただいたA7棟のデザインや、これから作るコンビニのデザインにも注文を付けたり、駐輪場を作るときにもアドバイスしたりチェックしたりする仕組みを作っています。

(委員長) それはこの大学の素晴らしい特徴だと思うのですが、それを大きく広報しておられますか。大学の中身についてはもちろん広報されていると思いますが、このキャンパスの環境には誰もが驚くと思いますので、もっと前面に出されたら良いと思います。非常にコンセプトがはっきりした大学だと感じました。

(大学) 受験雑誌は、まるで箱庭のようなキャンパスと書いてくれています。

(委員長) アメリカには名門女子大学がいくつかあり、前任校で協定を結んでいた関係で訪れたことがあるのですが、キャンパスが非常に綺麗だった印象が残っています。綺麗さのイメージは少し違いますが、遠くからこの大学のキャンパスを拝見したときにそういう印象を感じましたので、そういう言葉を少し使っていただけると、素晴らしい大学だと皆さんに思っただけなのではないかと思います。

(委員) この大学には何度か来たことがあるのですが、ゆっくり見せていただいたのは今回が初めてでした。キャンパスの素晴らしさをもっと広くアピールされたら良いと思います。それから、先ほどの授業でユニバーサルファッションを見させていただきましたが、いろいろ出されたアイデアが実際にアパレルの商品化に結びつくようなことはあるのですか。

(大学) 授業を見ていただいた森下先生は地場の繊維産業界との連携関係が深く、近江上布や高島ちみといろいろ連携しており、ちりめんを使ったブラックフォーマルで意匠登録を取ったことがあります。製品化までには、なかなかつながらないのですが。

(大学) ブラックフォーマルとは、前がスカートに見えるズボンで動きやすくというアイデアで意匠登録を取ったものです。販売するまでには至らなかったのですが。

(委員長) 今のブラックフォーマルの話は、とても意欲的だと思います。フォーマルな場面で女性が着たくなるものだと思います。

(委員) 初めて県立大学に来ましたが、思っていた以上に自然と共生されたアカデミックな学校だと思いました。皆さんがおっしゃっておられるように、もっとアピールをされるともっと認知度が高まるのではないかと思います。

(委員) それぞれの建物に個性がありながら、遠景も含めて全体の調和のとれた素晴らしいキャンパスだと思いました。私の大学も住宅街に囲まれ交通の便も良い自然にも恵まれたところだと思っていましたが、もう一段上の素晴らしいキャンパスだと思いました。

それから図書館を見せていただきましたが、滋賀ならではのコーナーも設けて、学習環境としてよく整備されており、使いやすそうな感じがしました。授業を拝見させていただいたときに年配の方が受講しておられたのでご質問させていただきましたが、とても自然にさり気なく地域の方が聴講されている様子は、地域の方の生涯学習という点においてもきちんとされていると感じました。

また、交流センターで見せていただいた展示ですが、入学したての学生にあれだけの条件を付けた課題を課してオリジナルの作品を作り上げるというのは、学生にとっては大変だったと思いますが、入学早々に鍛えられる場があるということは私どもも学びたいと思いました。おそらく学生は自信がついたと思いますし、一人でやること、共同でやることという両面を課しているという点で感銘を受けました。この取組は、毎年されているのですか。

(大学) 毎年の定番になっています。

(委員) 私も初めて大学を見せていただきました。外から見ていますと、昨今の大学キャンパスは羨ましいという思いをしております、その中でも飛び抜けて良い場所にあって贅沢だと思いつながら近くの湖周道路を通っていましたが、今日初めて学内を詳細に見せていただきました。最近、税金の使い道に個人的に非常に興味がありましたが、少し納得できたと思っています。

昨年、北欧の3か国を周ってきたときに学校にもお邪魔しましたが、今日はその香りがしました。学校としてのビジネスになるかどうかは分かりませんが、もっと地域の方が土日も含めて来てくれるようなことをされてはいかがか。昨今の日本は、そういうことをすると事故が起きるとかマイナスの話ばかりが出てきて、一向にどこもやりません。私は滋賀県人なのですが、湖南地区は人口が増えていますが湖北地区は人口が減っています。地域の人たちと大学が結び付き、そのことによって滋賀県出身に限らずいろんなところから学生が来てくれる大学になってくれると、税金をうまく使ってくれているなと思えます。今日は大学を見せていただき、大変認識を新たにしました。

(委員長) 大田理事長の説明で規模が小さい大学ということがありましたが、その規模にしては環境というキーワードを中心にいろんな分野が置かれており、小さいということはそういう特色を出しやすいメリットがあるのではないかと思います。小さいから他に比べて劣るということはないということはこの大学を見せてもらって思いました。授業の内容、社会人の方が学生と一緒に勉強している姿、特徴のある建物、木造の建物など公立だからできることであり、逆に国立大学、特に大きな大学はあまり個性がないように感じます。大学のあるべき姿の新しいイメージを与えていただいた感じがします。

(大学) 公立大学協会では国立大学と公立大学の違いを分析していきまして、国立大学は学部の配置は全方位で特に工学部が大きくなっていますが、それに比べると公立大学は看護、造形芸術関係、それから社会科学関係というように国立を埋める形になっています。何故かと言いますと、国立大学だけでは十分でないところを公立大学で県や市のニーズを埋めていく形になっているように、基本的には地域のニーズに基づいたものとなっています。そこが国立との大きな違いになっており、規模としては全方位でなくても良いわけで、国立大学よりも小さいですがミッションがはっきりしています。

(委員長) 他にございますか。

(大学) 各学部長にせっかく集まっていたいので、学部のPRを2分間ずつお願いしたいと思っておりますがいかがでしょうか。

(委員長) ぜひお願いします。

(大学) 環境科学部長の増田でございます。大学と地域社会との関係が連続的だということを強調させていただきたいと思っております。一つは景観ですが、この大学を建てるときに周辺の農村景観との調和を重視しまして、地域に馴染んだ建物になっていると思っております。もう一つは、「キャンパスは琵琶湖。テキストは人間。」というように地域社会との関わりをととても重視をしています。環境科学部の教育では環境フィールドワークという科目があり、地域課題を発見して教育につなげていくという地域とともに学ぶことを開学以来ずっとやっています。それから、学生の活動で近江楽座というものがあり、地域に活動拠点を作りながら地域の人達と一緒に活動をしていく中で育っていくということをやっており、地域とキャンパスとの敷居が低く連続的な教育をやっています。このたびCOO事業に採択されましたので、研究面でも地域課題を研究テーマとして受けとめながら積極的に取り組んでいきたいと考えています。

(大学) 工学部長の廣川でございます。県立大学の入学定員の600名のうち、工学部は150名でちょうど4分の1となっています。県立大学はいい環境ですが、周りに工学部の大学がないので切磋琢磨する部分が少ない気がしています。ですから、できるだけ学会等に学生を連れ出したり、他の大学の研究室の学生と発表しあったりということを何年も続けています。例えば、京都大学の学生と一緒にやると、最初、学生は尻込みをしていたのですが、そのうち自分たちも変わらないのだという認識が醸成されてきました。他の大学と地理的に遠いので、それをいかに近くに感じさせるかということが重要だと思っています。県立大学の認知度をいかに高めるかということとはとても重要な点で、どうすればいいか工学部でもいつも考えています。

それから、小さなことは劣ることではないという点も非常に重要なポイントで、工学部の人数は少ないですが、山椒はピリッと辛いように学会的には世界の第一線で研究をしていることを学生にいかに理解させるかということ工学部の教員は考えながらやっています。地方の大学なのでそんなに大した大学ではないのではというつもりで入ってきた学生が、研究室でしっかりした教育を受けているということを学会の場で理解してくれるようにすることを我々は常

に心掛けてやっています。

(大学) 人間文化学部長の田中でございます。人間文化学部は独立性の高い学科5つで構成されているのが特徴で、それは前身の短期大学を基盤にしているところがございます。地域との関わりを重視する形で4学科構成でしたが、3年前に国際コミュニケーション学科ができましたので、地域というのが滋賀県地域だけでなく世界に広がるような部分も含めて広い視野に立つような学部となってまいりました。ただし、5学科構成というのは、分野が様々ですので収束するところが難しいと思っています。他学科にあまり関心がない学生が他の学科についても知ることができるような共通の授業を作ったりしており、学部の特徴を生かしていけるようなことを考えていきたいと思っています。

(大学) 人間看護学部長の森でございます。2点お話ししたいと思います。

1点目は医療崩壊への対応ですが、滋賀県の湖東・湖北地域は医療崩壊が起こっており、看護師がいなかったために病棟が閉鎖されたりしていますので、卒業生の県内定着率をいかに高めるかが課題です。具体的には、前期入試の定員を増やしたり、推薦入試で県内出身者を20名取ったり、1高校からの推薦人数を3名に拡大したりして、県内定着率を上げて医療崩壊に対応していきたいと考えています。

2点目は、少子高齢化が進み医療のモデルが大きく変わってきている点です。国家予算の30パーセントが社会保障費となっており、第1次安倍内閣のときは20兆円でしたが、第2次安倍内閣では30兆円です。これは高齢者が増えるためで、医療も施設医療から在宅医療に変わっていかねばならないので、当学部も在宅医療を重視していかなければならないと考えています。

(委員長) まだまだあろうかと思いますが、本日はこの辺で終わらせていただきたいと思います。次回以降の委員会でも質疑の時間を予定していますので、その際にお願ひ致します。

では、お昼もまわりましたので、これから学生食堂におきまして昼食を取っていただこうと思います。ちょうど学生さんも大勢いると思いますので、昼食を取っていただきながら授業とは違った学生の姿をご覧いただければと思います。

5. 昼食

○学生食堂にて昼食

6. 閉会

○事務局から第2回委員会についての連絡